消化器外科1での初期研修

1年目研修医　成井　諒子

11 月末のある月曜日の朝、一外の医局へと向かう私の足取りは重かった。その日から始まる 2 ヶ月間の外科研修を思い、不安と心配で胸はいっぱいだった。不安と期待ではなく、不安であり心配であり気分は暗かった。

思えば、物心ついた頃から、幼稚園で折り紙を折り始めた頃からだったろうか、自分が不器用であるということに気付いた。幼稚園でも小学校でも中高でも、手作業に入るといつも下 10%タイルにいた。そんな私は精神科医を志し、手先をつかうつもりは全くないままに医学部に進学した。あまり教育熱心ではない神戸大学に入ったのをいいことに、解剖はペアの器用な男の子に全てを任せ、ポリクリは何となくごまかした。もちろん医師となったこの 4 月からはいくつかの手技を行わざるをえず、また精神科への興味はもはや薄れていたが、しかし私にとって手技とは、末梢確保、腰椎穿刺、挿管までであった。そこまでの手技が完全に出来るようになることが私の研修 2 年間の目標であり、そしてそこまでで何とか済ますのが生涯の目標だった。そんな私にとって、新臨床研修制度で 2 ヶ月の外科研修が必修であることは全くありがたい話ではなかった。おまけに私の中での外科医のイメージといったら、カルテは短く、喋りはぶっきらぼう、上をたて下にはきつく自分は大好き、よく働くけどよく遊ぶ。そんな外科医達のなかで不器用な私がやっていくことを考えるだけで当然気分は暗くなる訳であった。

研修医にはローテート初日に挨拶に伺う先生の名前が記されている紙が前もって配布されるのだが、私のところには「～月～日 9:00　江畑先生」とあった。何事にも予習が肝心と考え、前に一外を回った同期の研修医に「ねぇねぇ、この江畑先生ってどんな人？」と聞いてみた。「とっつきにくいけど、すごくいい先生だよ」…ん～とっつきにくいのか…不安と心配を胸に江畑先生を訪ねた。江畑先生は細かいオリエンテーションはなさらずこうおっしゃった。「外科医は妄想力です。あなたもこの 2 ヶ月で妄想力を鍛えて下さい」…とっつきにくいというより、100%理解不能であった。

研修初日は、回診の後ろにオマケのようにくっつき、検査を見学し、症例検討会に出席した。最前列の教授の隣の特等席を与えられ、最後には自己紹介をするよういわれた。私は、正直に「著しく不器用なのでご迷惑をおかけすると思いますがよろしくお願いします」と挨拶した。するとすぐさま隣の梛野先生が「不器用ってどれくらい不器用なの？」…へ？？不器用にレベルがあるのか！？…大学 6 年間を関西で過ごしてきた私であったがこんな厳しいツッコミを受けたのは初めてであった。さすが教授！と思った。

2 日目から、回診はオマケではいられなくなった。カットインという技を強いられるようになったのだ。俗に、カットインとは先生方が患者さんの服を脱がせお腹をみてガーゼを交換しまた服を着せるという一連の動作にむりやり割って入ることをいうのであ

消化器外科1での初期研修

1年目研修医　成井　諒子

るが、これがまた非常に難しい。まず上の先生に対して遠慮があるため押しのけるのが気まずいし、そして割って入っていったところで次の動作ができなければただの邪魔者と化してしまう。次に何を行うのかがわかった上でさり気なく先生のアシストをしなければならない。また診察後にごく普通に服を着せているともう回診集団は次の患者さんに進んでいるので、速攻で服を着せ、なおかつダッシュで次のベッドまで行かねばならない。次に遅れると、すぐに「立ち位置が悪い」とお叱りを受ける。ひとりドタバタし、回診が終わったときには汗ぴっしょりであった。

回診後の末梢確保も横に上の先生がついてくれていたのは最初の数日であった。一外の患者さんは救外に比べ難しく、かなり苦戦を強いられた。失敗が続き落胆していると、上の先生が自らの血管を5回も差し出して私の練習台となって下さった。その御蔭もあり当初の3勝7敗くらいから、いま現在では7勝3敗くらいと地道に勝率を伸ばしている。

右も左も背も腹もわからず 1 週目に入ったオペでは、まず一緒に入る先生に電話して「今日のオペは2件目ですけど何時くらいからですか？」と聞くと「そんな野暮なこと聞くな！匂いで嗅ぎ取れ！！」…オペ中は、術者の先生に「ここもって。いやここ、もっと俺にくっついていいから。くっついただけじゃ子供はうまれんよ」と言われ、思わず笑っていると、別の先生には「オマエ、せっかくいいフリもらったのに流すなよ！もったいないことするな！」と言われ、「え～」と返せば、「だからぁ、何回いったらわかるんだよ、え～じゃなくてまずすみませんだろ！！」と。このようにセクハラにパワハラを重ねられることも少なくなかった。

突然「自己血採血をしといて～」と言われ、「いやいや、そんなん1回もしたことないですよ」とこたえれば、「あぁそうか、そうやっておまえは逃げるのか。じゃぁおまえは 1 回もしたことないことからは逃げ続けて死んでいくのか！」と無茶苦茶な攻撃を受けることもあった。13 階病棟から 7 階病棟へのおつかいを頼まれたときは「ダッシュ！」と言われ、真に受け往復ダッシュで用を済ませ息を切らしながら13階に戻ると「え、マジで階段で行ったの!?」と笑われ…お昼に誘われたときは「ごはんだからダッシュで～～まで！」で慌てて全速力ダッシュで行くと未だ誰もいなかったり…挙句の果てに「先生のダイエットに貢献してるんだから感謝して」と言われる始末。こんな調子で理不尽極まりなく走らされているにもかかわらず、お昼を毎日がっつり御馳走してもらっているせいか、逆にこの2ヶ月で太ってしまった…どうしてくれよう。

ところで私はフェリス中高出身(※1)なのだが、先生方にはさんざん「フェリスのイメージを壊す」と言われた。別に私は“フェリスがお嬢様学校だ”とも言っていないし“私がお嬢様でない”とも言っていない。なのに、挙句の果てに西尾先生には「今日からおまえは千種高校出身だ」とか無茶苦茶なことを言い渡された。失礼な話である。

手術にはたくさん入らせて頂いた。お腹の中身を間近でみるのは新鮮であり強

消化器外科1での初期研修

1年目研修医　成井　諒子

烈でありとてもおもしろかった。もちろんポリクリ等でみることはあったが、それはあくまで眺めているだけであった。まじめにお腹を触って、まじめにレントゲンやCTをみて、まじめに病態を考えるようになってからは、まだお腹の中身をみていなかった！つたない介助をしているうちに、皮膚の上からプルンと触れる肝辺縁がほんとはどんだけプルプルしているか感じ、小腸を引っ張っりながらぜんどう運動のプスプス感を手で実感した。胃摘のオペをしている最中も、めげずにたんたんと動く腸に思わず眼が釘付けになり、「おまえの気が散るからこれはしまっとこう」と腸をしまわれたこともあった。そんな風にお腹の中身を感じることがどれだけ普段の救外での診療に役立っているかはわからないが、少なくとも内科を回るだけでは学べなかったことだと思う。

医局内に私の机をつくって下さった。それはこれまでのローテートで初めてのことでとてもありがたかった。はじめの江畑先生の説明では、「何も用事がないときもイベントのにおいを嗅ぎ取るため、くつろいだり寝たりするときもぜひここにいてください。」と言われた。素直な私はその机でよくつっぷしていた。また医局にある漫画(※2)を参考文献として読むよう強要された。それはオンナノコに読ませるものとはとても思えないセクシュアル＆バイオレンスな漫画であり、さらに漫画の名言シーンには付箋が張られていてその箇所を暗記することも強要された。そこかよ！！と突っ込みたくなるようなところに付箋は貼ってあったが、素直な私は懸命に読み懸命に覚えた。いつしか自分で付箋を貼るまでとなった。そんな風に日々自分の机で上のいうとおり素直に漫画を読み寝ていると、今度は西尾先生に「先輩が働いている横で堂々と漫画を読んだり寝たりできるなんて何て神経のずぶとい奴だ」と笑われた。針のムシロである。

また極度に朝が苦手である私がある朝目覚めると 10 時半！ということがあった。手術日ではなかったが 9 時からの回診があった。今日という日はなかったことにしてこのまま寝続けようか!?…いろんな考えが頭に浮かんだが、とりあえず研修医室に行き PHS を確認した。先生からの着信があった…おそるおそる電話をかけると「オマエ何してたんだ？」「いま起きました」「そうか、じゃぁ今日はおもしろいことを 3 つ言え」「へ？　で、私はいまからどうすれば？」「何事もなかったかのようにシレっと 7W(病棟)にいろ」…案外優しかった。元来朝が苦手な私は、目覚まし 2 つを手に社会人となり、働き始めてから2回の遅刻で目覚ましは4つになっていた。「あぁ～今日また遅刻したので 5 つ目を買わなきゃ」と言うと、先生は「オマエ、一外で誰の声が 1 番びびる？」「ん～伊神先生ですかね」「じゃぁ伊神先生の声を目覚ましにいれてもらえ」…目覚まし時計を用意し伊神先生に頼んだ。「わかりました、入れておきます」とおっしゃり、翌日私の机には時計が返されていた。ドキドキしながら再生すると、そこには手術中や検査中のときに勝るとも劣らない伊神先生の怒声が…！大爆笑☆御礼を言うと「いやぁ何もないのにね、そこまでテンションあげるの大変でしたよ」…大変だったとはいえ、何もネタがなくてもそこまでのテンションにもっていける伊神先生を改めて尊敬した。

C名古屋大学大学院　腫瘍外科学

消化器外科1での初期研修

1年目研修医　成井　諒子

現在では実用化に踏み切っているが、朝次々と鳴り響く4つの時計を完全に敵と仮想し消していく中に伊神先生の声が聞こえると、何だか急に味方が現れた感じがして別の感情が芽生えそうになる…

1年目のきらきら研修医にとって教授回診は最もドキドキするイベントの1つであったが、梛野先生はいつもとても優しかった。肝門部と全く関係のないフツーのお喋りをしながら教授と回る回診は結構楽しかった。が、冬休みが終わり学生と共に回るようになると、いきなり学術的質問がとんできた。「なるちゃん、知識は意外とないねぇ～」と笑われた…

さて一外での研修も終わりかけたいま、私は何が変わったのかふと考えてみる。横の先生がガーゼをもてばテープを用意するし、ハッピーキャスは二段目で針糸は四段目にあることも知っているし、オペ帰りはストレッチャーより先にダッシュし△ボタンを押しエレベータをおろしておくのが習慣になったし、口を開けば「すみません」が出てくるようになった。ではいったい何を学んだのか？？…先生方のお手伝いをするときは、まず動きをひたすら観察し、何をやろうとしているのか次に何がしたいのかを考え、何が必要か手伝えることはないか常に頭をめぐらす。そこには一瞬の油断も許されない、と書けば大袈裟になるが、ガーゼ張り1つとってもそれまでよくみていなければ適切なタイミングで適切なガーゼを渡すことができない。そのうち、なぜあのときはあっちのガーゼだったのに今回はこっちのガーゼ？なんてこともでてくる。考えなければわからないし、時には聞かなければわからないこともある。しかしそこには必ず理由がある。どんな些末なことでも先生方はより効率よくより低侵襲に行うよう考えていた。回診にくっついて、カテ交の外回りをして、オペに入って、数え切れないくらいたくさんの小さなことを学んだ。が、何より私が学んだものは、どんなときでもどんな些末なことに対しても人の手伝いであっても手を抜かず気を抜かず常に思考しよりスマートに行う努力を怠ってはならないというその姿勢である。これからの私の医者人生にとって間違いなく大きな収穫であったと思う。

実際、大学のような高度先進医療を担う病院で初期研修を行うことに賛否両論があると思う。大学では珍しい症例が多く大変な手術が多い。しかし私でもビックリするくらいの画像所見があるような人が、10 時間以上の手術で 10L 以上の出血をした後にどんどんどんどん元気になっていく姿をこの眼で見ることができたのはすごく貴重な経験であったし、高度先進医療の一翼とはいわないまでも羽根の毛の一本にでもなれたことはすごく嬉しかった。周りは年の離れた先生方ばかりで最初はびびっていたが、どの先生もあまりにやんちゃでむじゃきで 10 や 15 も歳が離れていることを容易に忘れさせた。個性的な先生ばかりでおもしろく話しやすく、そしてもちろん知識も経験も豊富なので何でも聞きやすく何でも教えてくれた。私に対する失礼な言動さえのぞけば、パーフェクトだった。どんな場所にいてもどんな環境にあっても、学ぶこと

消化器外科1での初期研修

1年目研修医　成井　諒子

はいくらだってあるし、自分がのびるチャンスはいくらでもある。一外での二ヶ月であらたな自分の伸びしろを見つけることができた。

　　たらたらと長くなってきたが最後にもう1つ、最もいいたいことが残っていた。それはこの一外での二ヶ月がすごく楽しかったということである。学んだことは書けても何が楽しかったかを書くのは難しい。が、兎に角毎日が楽しかった。これは私に接してくれた全ての先生方が日常の激務で大変忙しいにもかかわらず私の相手をして下さったからということに尽きる。初めは心配で不安でともすれば回りたくもなかった外科研修であったが、そんな先生方に囲まれ、こんなにも楽しく過ごせた。私は本当に幸せだったと思う。

　　振り返ると、お手伝いしたことより迷惑をかけ仕事を増やしてしまったことの方が多かった気がするが、それでもいつも温かくかまってくださった先生方には心から感謝している。梛野教授はじめ腫瘍外科医局の全ての先生方に御礼申し上げたい。ありがとうございました。

※ 1. フェリスは横浜中華街と眼と鼻の先。という訳でフェリス成井の中華街オススメ店。

値段　店名(味、オススメ料理)

☆☆☆　萬珍樓(あっさり何でも、点心)、同發(無難に何でも)、重慶(麻婆豆腐・エビチリ)

☆☆　菜香(炒めものとか)

☆　謝甜記(おかゆ)、安記(おかゆ)、徳記(かにみそ、麺)、海南飯店(チャーシューねぎそば)

※ 2. その漫画の名は“カラテ地獄変　牙”　何でも江畑先生がヤフオクで必死に競り落としたものとか。人生で学ぶべき全てが凝縮され描かれている…らしい。(江畑先生談)